

チーム支援を進めるための健康相談活動の在り方

ー 校内LANの活用による情報の共有化 ー

佐賀県立有田工業高等学校 養護教諭 橋本 節子

要 旨

本研究は、保健室へのコンピュータ設置や校内LANの普及が急速に進展する中、その校内ネットワーク機能を健康相談活動に活用し、支援のための情報を共有化し、学校内での職員の連携を深め、日常的チーム支援による生徒の「心の居場所」づくりを進めるための具体的方策について研究した。

研究を進めるに当たって、学校の実態を踏まえ、「心と身体のサイン」である保健室利用情報を関係職員と共有していくための情報提供及びチーム支援の在り方を探り、個人情報の保護を念頭に置き、連携の充実のための保健室利用者情報提供用のデータベースシステムを作成した。

<キーワード> ①チーム支援 ②健康相談活動 ③校内LAN活用 ④情報の共有 ⑤データベース

1 主題設定の理由

児童生徒の心の問題の増加を受け、学習指導要領では、不安や悩みの対処能力の育成が示され、養護教諭の職務にも健康相談活動が加えられた。

健康相談活動で行う支援は、学校教育の行われる全体場で、学校組織を活用しながら、職員のチームによる支援が有効と考える。学校全体で支援できる環境づくりを進めることが、児童生徒の「心の居場所」としての学校機能を高め、健全な心の発達支援につながるものとする。学校全体での支援体制を充実させるためには、情報の共有が欠かせない。

しかし、県内の高校においては、職員室や分室等が10箇所以上の学校が半数を占めており、全職員での協議の場が少なく、日常的な連携がとりにくいのが現状である。そこで、本年度から佐賀県教育委員会の事業として実施される情報機器整備事業の機会をとらえ、情報機器のメリットであるタイムリーな情報交換が可能であること、離れた場所でもネットワークがもてること及び時間調整ができない場合でも書き込みによる情報交換が可能などを生かした校内LANの活用を考えた。その際、相談活動における情報は、個人にかかわる情報であるため、その管理については、適切な運営方法が求められる。

以上のことから、県内の高校の実態を基に支援策の一つとして校内LANを活用し、支援を広げるための情報を保健室から提供することにより情報の共有化を図り、職員の生徒理解を深め、情報共有とチーム支援を進めたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

学校内でのチーム支援を進めるために、校内LANを活用した健康相談活動の在り方を探る。

3 研究の内容と方法

- ① 「心の問題」をもつ生徒への学校内でのチーム支援について、文献や資料を基に理論研究を行う。
- ② 県内の高校の健康相談活動におけるチーム支援と連携の現状について明らかにし、情報の共有化が有効な内容について検討する。
- ③ 「心の問題」の支援を目指し、校内LANを活用した情報の共有化による連携を図るため、実態調査を基に、個人情報の保護やセキュリティー対策を考慮し、情報提供用データベースを作成する。

4 研究の実際

(1) 健康相談活動とチーム支援

ア 健康相談活動における支援方法

養護教諭が健康相談活動を通し担うべき役割は、「児童、生徒の健康の保持増進を図り、もって学校教育の円滑な実施とその成果の確保に資する」とされる学校保健法の目指すところである。

図1は健康相談活動の支援段階と、心理教育的援助サービスの3段階(日本教育心理学会, 1996)を対比したものである。一次的支援の対象者は、支援を受ける全校生徒であり、健康増進のための支援である。次に、二次的支援の対象者は、病気による不安を抱える生徒や様々な訴えにより保健室に来る生徒である。さりげなく保健室に来て、保健室のもつ機能を活用しながら、問題を解決していく生徒もここに含まれる。三次的支援の対象者は、保健室登校者等継続的支援を要する生徒が考えられる。

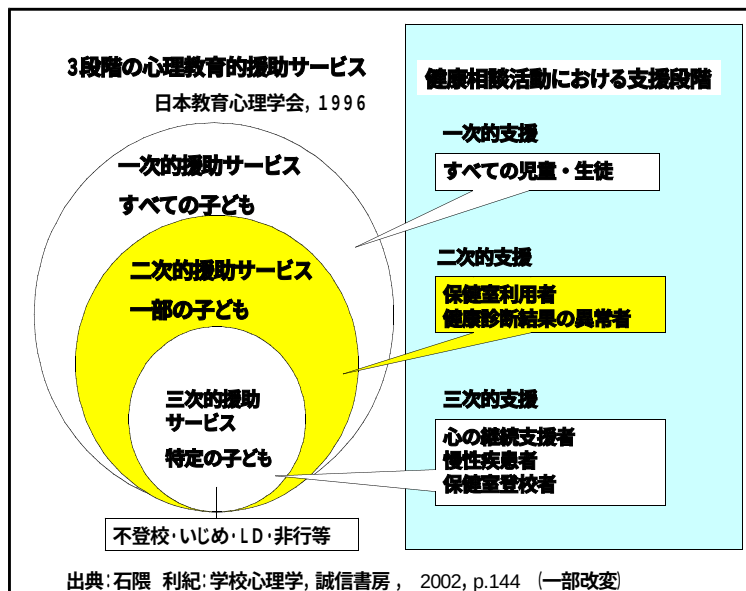


図1 健康相談活動における支援段階

本研究の支援対象者である高校生の発達段階は、身体面、心理面、社会面での 発育等が急激であり、精神的にも不安定な「自我の確立期」である。成長に揺らぎのある高校生の支援としては、日常的に二次的、三次的支援の充実を図ることが重要だと思われる。

イ チーム支援の機能

生徒を取り巻く環境は大きく変化し、生徒の理解のためには、教職員の一人のもっている情報だけでは対応できない場合も多く、一人の教職員で行える支援には限界がある。そこで、教職員が役割分担することにより支援の広がり期待できるチーム支援は、これからの生徒の支援として有効と思われる。チーム支援では、①生活全般を多面的・総合的理解、②全体を見通す教職員によるそれぞれの立場・役割を生かした支援、③中心となる支援者を周囲が情緒的に支え、生徒の心の安定を図ること等が可能と考える。

(2) 健康相談活動の現状

学校内の教育相談における連携の在り方やそれを深めるための情報交換(情報機器の活用を含む)の現状と今後の在り方について把握するため、県内の高等学校及び特殊教育諸学校63校の養護教諭を対象として、アンケート調査を行い、59校より回答を得た。

ア 「心の問題」への支援体制と教職員の連携

調査結果では、生徒の「心の問題」の支援体制が「整っている」又は「だいたい整っている」と回答があったのは51%であり、その中で、その体制が充分機能している学校は12%であった。これを、生徒の「心の問題」を支援する場合の教職員の連携からみると、図2に示すように、33%の学校で「連携が余りとれていない」又は「連携がとれていない」と答えている。

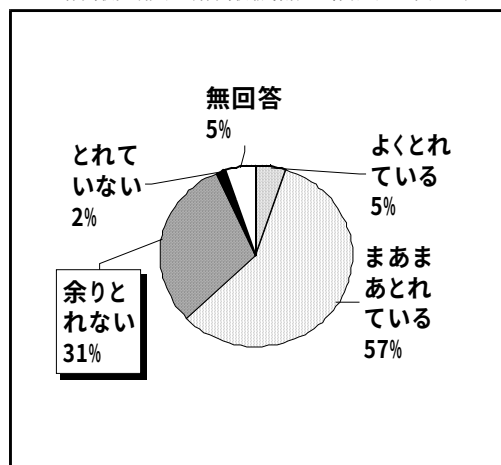


図2 教職員の連携

そして、連携がとれていない理由としては、「関係者が部活指導で忙しく、情報交換の時間がもてない」が最も高く、22%であった。また、生徒の「心の問題」に大きな役割を担っているのは、図3のとおり担任が最も多く、次に養護教諭、教育相談担当者と回答した学校が多かった。

イ 保健室からの情報提供

生徒の「心の問題」の支援を行うためには、養護教諭は、教職員との連携を深めるために、保健室からの情報提供が必要なることを認識しており、健康診断情報、保健室利用情報、健康教育情報の提供を、主に印刷物や口頭で行っている。また、「保健室からの情報としてどのようなものが有効だと思うか」の問いに、「保健室利用状況個人情報」の回答が46%で最も多かった。そして、その方法として保健室来室者の連絡票の発行、電話連絡、月別来室者等の情報提供を行っている。この方法のうち、電話連絡については、「担任等の授業の関係で電話連絡が取りにくい」、「保健室からの電話連絡は生徒に聞かれる心配がある」、「生徒への対応に追われて連絡が取りにくい」といった不安も挙がっていた。また、学校規模数が大きくなるにつれ、「連絡が取りにくい」との回答率が高かった。

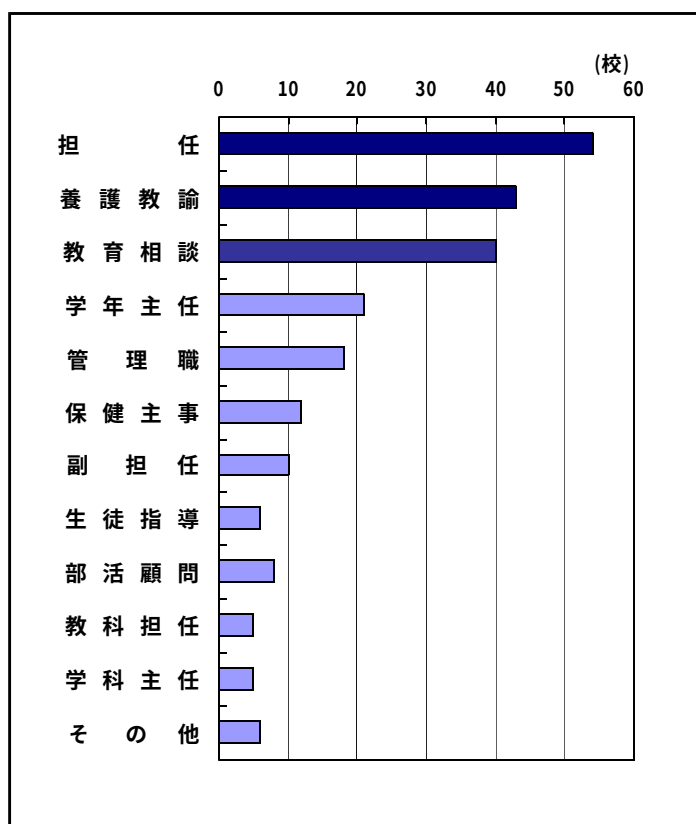


図3 「心の問題」の支援者としての役割が大きい立場

情報提供の回数をみると、印刷物による情報提供は、年間10回以上行われているのが、「全体情報」では24%、「個人情報」で14%であった。口頭での10回以上の情報提供は、「個人情報」の38%であった。

ウ 校内LANと情報機器活用状況

校内LANの接続が行われている学校は90%にのぼる。しかし、校内LANを活用した保健室からの情報提供が行われているのは、わずか17%のみであった。また、その情報の内容も、定期健康診断結果のみで、日常的な情報提供の方法としての校内LANの活用は行われていなかった。

養護教諭の情報機器活用状況は高く、86%がコンピュータを仕事に「よく使う」「まあまあ使う」と答え、その中で表計算機能のExcelの利用者の割合は81%であった。また、保健管理用のソフトウェアは、約半数の学校で使用されていた。しかし、32%の学校は「使わない機能がすぎる」「必要とする情報が引き出せない」など不都合さを指摘していた。また、保健管理ソフトウェアが使用されていない半数の学校では、「使わない理由」として、「操作に自信がない」「高額であり学校予算で買えない」との回答が43%を超えていた。

エ 考察

教職員の連携によるチーム支援のための、保健室からの情報提供を考えると、まず、生徒の支援に最も大きな役割を果たしている担任や教育相談へ行うことが有効である。そして、その内容としては養護教諭と教職員の双方が必要とする「保健室利用情報」の提供が、支援効果も期待される。

実際、伊万里西松浦地区高等学校養護教諭によって行われた、教職員72名に対する聞き取り調査の結果からも、保健室利用者についての情報提供を望む割合は高く、提供された情報は、生徒の個人面談、保護者との懇談に生かされている状況もあり、活用性は高いと思われる。

現在の養護教諭が行う情報提供は、その必要性を理解しながらも、その提供回数は少なく、日常的な支援に十分な活用がなされていないことがうかがわれる。

そこで、情報のタイムリーな共有化が可能な校内LANを利用した校内ネットワークを活用し、チーム支援を実現できないものかと考える。また、校内LANを使用するに当たっては、現在、90%の学校は校内LANの使用環境も整い、コンピュータを保健室の日常業務に使用している学校も多いことから、その利用も見込める。校内LANの利用により、教職員の協議時間の不足や職員室が離れている物理的環境も補えるものとする。

一方、健康相談活動にかかわる情報は、個人情報が多いことから校内LANの活用についての不安もある。そこで、校内LANによる情報の共有化に当たっては、これらのことを配慮した情報の提供の在り方を考えていく必要がある。

(3) 校内LANによる情報の共有化

支援が指すものと情報の位置付けを示したものが図4「情報提供の全体の流れ」である。まず、担任が養護教諭から提供された保健室利用状況を把握する。そして、担任はその情報を学習、家庭環境等の生徒の全般より判断する。また、保健室利用情報を基に、気掛かりな状況の詳細について養護教諭と協議を行う。その際には、それまで蓄積された保健室の利用情報も活用される。また、情報を得た生徒の様子を観察し、支援が必要なタイミングを把握する。場合により、他の関係教職員の協力を求め、情報交換を行う。

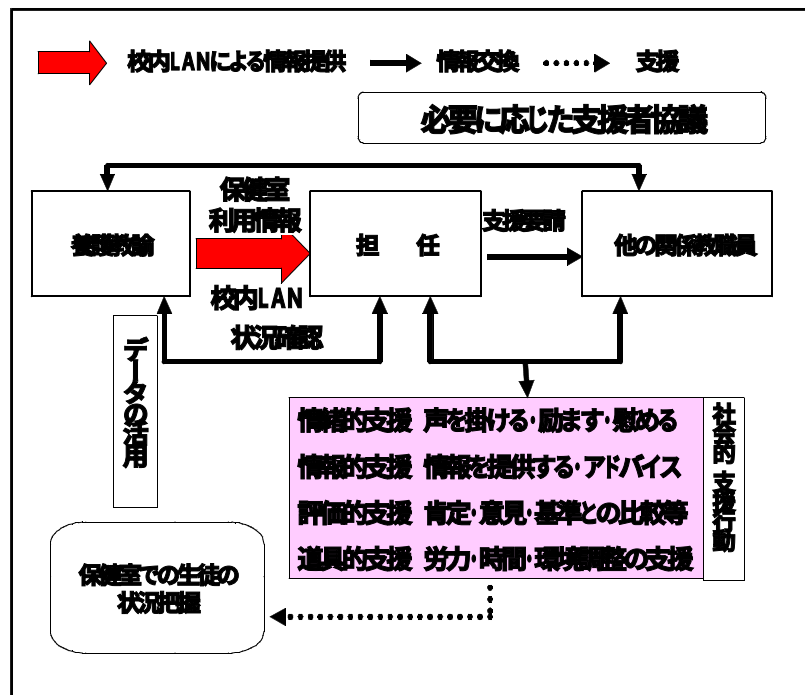


図4 情報提供の全体の流れ

このように、担任は心が不安定な状況の生徒に、社会的支援行動である情緒的、情動的、評価的、道具的支援を行ないやすい立場にあることから、担任との情報の共有をチーム支援の最初の段階とらえた。担任は、保健室利用情報から生徒理解を深め、「心の動揺」への支援方法を判断しやすい立場にあり、支援の機会も得やすい。タイミングの良い支援による心の安定こそが、心の問題の予防にもつながる。

また、ここでの情報は、個人情報であるが、校内で生徒と日常的に触れ合う機会の多い職員への情報提供に限定することで、より慎重に取り扱われ、不必要な情報の提供によるプライバシーの侵害も予防できるものとする。

(4) データベースの作成

従来実施してきた情報提供方法である印刷物、電話連絡、口頭に加えて、校内LANを利用した情報を提供するために、データベース型ソフトウェアAccess2000を用い、実態を基に「保健室利用者情報提供」用データベースを作成した。作成したデータベースと従来の保健管理型ソフトウェアの比較をしたのが次頁表1である。コンピュータの特性である、タイムリーな情報提供によるタイミングの良い支援とデータの蓄積による年度を越えた継続的情報の把握を可能とするなど、年度を超えた職員の連携の手段としての活用効果も期待できる。

表1 従来型保健管理ソフトと作成データベースの比較

ねらい	機能	従来型保健管理ソフト	作成データベース
ネットワーク	全体の機能	保健管理・統計可能	相談活動・保健管理に使用可能
	校内LAN対応	なし	検索画面のみ確認可能
	メニュー画面	来室者入力画面・検索画面が主な機能	健康教育情報の検索が可能 来室者入力・検索画面あり
操作性・簡易性	入力画面	来室者入力画面からの個人情報検索なし	来室者画面からの個人票の検索可能 個人票より来室経過確認可
	処置入力	選択方式	チェック方式
	症状・処置の詳細	選択方式	記入欄あり
継続性	管理	年度別管理	個人票は三年間の経過確認が可能
セキュリティ対策	セキュリティ	コンピュータ本体の設定	データアクセス時にパスワードが必要
	画面表示	コンピュータ本体の設定	データ入力画面・検索画面に、表示時間タイマー設定

ア システム構成

保健室利用情報の提供は、教職員と養護教諭の双方から支援情報としての認知度が高く、日常支援への活用も期待できる。しかし、個人情報であるため、より高いセキュリティ対策が必要であり、また、養護教諭のコンピュータリテラシーを配慮したデータベースが必要である。

そこで、実態調査を基に、相談活動の充実、データ蓄積性、連携の充実、セキュリティ対策の検討を行い、システム構成を図5ののとおりとし、管理者入力画面(図6)と教職員検索画面(図7)を設け、パスワードによるログイン方式とした。そして、教職員検索画面には、生徒理解のための情報を掲載した。

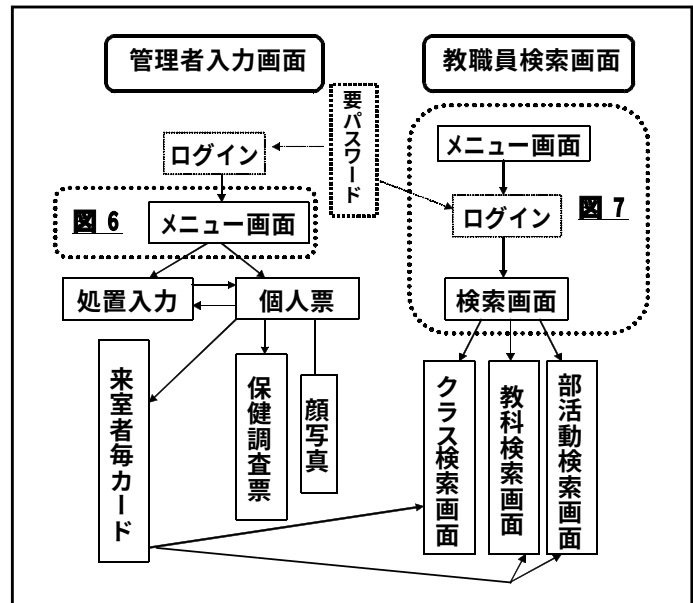


図5 システム構成

入力フォーム	検索	印刷・終了
保健室 利用時入力	関係職員との 連携資料として 検索	保健室利用者の 全体傾向の周知 用資料
来室者入力	来室者検索	クラス別一覧
個人票入力	クラス別利用	症状別一覧表
	部活動別利用	原因別一覧表
	教科別利用	処置別一覧表
		閉じる

新年度整理

年度: 16

担任と生徒登録

通学方法入力

教科名入力

部活動名入力

校時名入力

図6 管理者入力画面

相談用、健康教育用として 情報提供し、情報検索 ができる	関係職員が支援資料として 活用するために検索可能	印刷・終了
生徒理解のために保健室から	年度: 16	クラス別利用
心のサイン見逃さないで	ユーザーID:	部活動別利用
ストレスから起こる身体症状	パスワード:	教科別利用
心因性症状の特徴	クラス別利用	
県内相談機関リンク	部活動別利用	
	教科別利用	閉じる

図7 教職員検索画面

図8は「保健室来室者入力画面」である。相談活動の充実につなげるために、入力画面に備考欄を設け、来室時の気になる観察内容の書き込みを可能とし、観察記録が残るようにした。また、処置入力時に個人票の確認や、保健調査票による、既往歴の把握が可能な内容とし、支援資料が得られるよう工夫した。

図9は「クラス別検索画面」である。教科担任画面及び部活動顧問の検索画面も同様な検索項目とした。

図9 クラス別検索画面

図8 保健室来室者入力画面 ※一部拡大

また、データの蓄積性については、入学時に個人番号を登録し、3年間のデータを検索可能とした。連携の充実を図るため、検索画面は処置欄に「担任連絡」と明記することで、連携のメッセージを送り、情報交換の手掛かりにできるよう工夫した。

最後に、セキュリティ対策として、情報を最少限とし、検索画面に入る場合の二重パスワードを設定し、データの保管場所も限定した。また、教師の職務上、入力中の突発的な事態のために、その場を離れるとも考えられる。そのような場合を想定して入力画面にはタイマーを設定している。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

作成したデータベースを、現在、2校で試用しており、そこから、操作についてマニュアル化するための情報が得られた。操作方法や個人情報保護に関する資料について、年間を通し使用することにより、より使いやすいデータベースを検討し、健康相談活動に活用していきたい。

(2) 今後の課題

- ・ 開発したデータベースを、年間を通して使用し、個人情報の在り方やその使用方法について検討を重ねる。
- ・ 健康相談活動への有効性を確認し、システムの汎用化を図る。

《参考文献》

- ・ 石隈 利紀著 『学校心理学』 2002年 誠信書房
- ・ 井上 智義著 『データベース』 2003年 北大路書房